

## 青年期における生涯学習としての家庭生活の課題

多々納道子\*、河原亜姫\*\*

(\*教育学部家政教育研究室、\*\*島根県八束郡宍道町立宍道小学校)

The Family Lives Tasks as the Lifelong Education in the Adolescence

Michiko Tatano & Aki Gobara

The purpose of this investigation was to clarify the family lives tasks as the lifelong education in adolescence. The results were as follows :

The university students who learned home economics education at high school were recognized tendency of gender free. However there were significant differences between female students and male students, and male students were found in gender role perception for family life. The gender role behavior of their parents affected to form the university students gender role perception and behavior. Therefore the programs for home economics education of high school have to develop to reform gender role perception and behavior.

### I 緒言

家庭生活と職業生活とは、我々の生活構造を構成する重要な要素である<sup>1)</sup>。わが国社会の21世紀の最重要課題である男女共同参画社会の形成・推進に向けて、男女がともに家庭生活と職業生活を営む能力を身につけることは重要であり、青年期における生涯学習の課題といえる<sup>2)</sup>。このことは、生活的自立を中心に精神的及び経済的自立を実現し、真に自立した生活者の育成を目標とする家庭科教育の達成課題そのものであるため、男女共同参画社会を推進するにおいて、家庭科教育へ大きな期待がかけられている<sup>3)</sup>。

家庭科教育は長年、女子に対して家庭生活における課題達成能力の育成に強く関わってきた経緯がある。他方、1975年の国際婦人年世界会議で採択された世界行動計画には、男女平等、女性の地位向上実現の鍵になる概念である男女の固定的な性別役割分業を見直す取り組みが盛り込まれた。これを受けて策定された国内行動計画の成果として、家庭科教育は1989年の教育課程の改訂によって、小学校から高等学校段階まで男女に等しく開かれた学習機会となった。

性別役割の形成・発達過程<sup>4)</sup>からみると、役割習得には社会化すなわち学校教育や家庭教育が重要な役割を果たしており、相互関連のもとで個々人の性別役割分業意識や役割行動が獲得される。したがって、固定的な性別役割分業意識や行動を変革するには、まずそれらの形成に関わる学校教育と家庭教育との実態を明らかにするとともに、相互の関わりを検討する必要がある。

本研究は、このような問題意識のもとに、高等学校で家庭科を学習した男女大学生を対象に、性別役割分業意識、家庭科の学習内容、家庭科のイメージ、家庭の仕事の実践状況、家庭教育の実態、将来の家庭の仕事・育児の分業意識、女性の職業観等を調査・分析し、家庭生活と職業生

活の両面を担おうとする意識が形成されているのか、家庭生活を営むための準備状況や課題を明らかにし、家庭生活面での課題達成あるいはどのような面が今後の達成課題として残されているのかを検討し、家庭生活における青年期の生涯学習の課題を明確にすることを目的にした。

## II 調査

### 1. 調査対象

調査対象は、島根大学に在学する学生で、教育学部、法文学部、総合理工学部および生物資源科学部の1回生から4回生までの男女365人であった。調査の結果、高等学校で家庭科を学習した男子は、145人、女子は203人であったので、これら348人の学生を分析の対象にした。

### 2. 調査方法

各々の講義の時間に質問紙法によるアンケート調査を実施した。

### 3. 調査時期

平成11年7月下旬と10月に実施した。

## III 結果及び考察

### 1. 調査対象者の概要

学生の所属学部を全体で見ると、無回答者1.1%を除き、教育学部60.1%、総合理工学部15.9%、生物資源科学部12.6%、法文学部10.3%であった。

居住形態を求めると、アパート・下宿が最も多く74.1%、自宅19.0%、学寮6.0%の順であった。

出身高校の所在地は、32都道府県にわたって分布していた。その中では、島根県が男子27.5%、女子48.3%と最も多く、次いで岡山県、広島県の順であった。中国地方出身者を合わせると男子57.0%、女子75.0%を占め、女子の出身校所在地は、男子以上に地元志向が強いといえる。

調査対象者が学んだ高校の特徴をみると、男女共学校在学が91.1%、所属学科は87.6%が普通科で、その他は理数科、職業科の順であった。

### 2. 性別役割分業意識

固定的な性別役割分業意識を表現する「男は仕事、女は家庭」についての捉え方をみると、表1に示したように、全体的には男女とも「賛成」するものよりも「反対」するものの方が多く、否定的な傾向にあることが明らかになった。

しかし、男子で最も多いのは「どちらともいえない」、次に「どちらかといえば反対」であるのに対し、女子では「どちらかといえば反対」、「どちらともいえない」の順位であった。また、「賛成」と「どちらかといえば賛成」を合わせて賛成の傾向にあるものは、男子22.7%、女子6.9%であるのに、「どちらかといえば反対」と「反対」を合わせて反対の傾向にあるものは、男子36.6%、女子61.6%というように、賛否の傾向は男女間で対照的な結果を示した。すなわち、男子の方が女子よりも固定的な性別役割分業意識にとらわれる傾向が顕著で、 $\chi^2$ 検定を行ったところ、1%水準で男女間に有意差が認められた。

青年期における生涯学習としての家庭生活の課題

男女とも高校で家庭科を学習してきたにも関わらず、男女差が顕著であったことから、差異をなくすための指導の工夫が求められる。それには家庭生活に関して男女がともに学ぶというだけでなく、固定的な性別役割分業を見直すことを直接的に取り上げるなど教材の創意工夫<sup>5)</sup>や性差をふまえた指導が必要なことを示唆していると考えられる。

表1 性別役割意識  
「男は仕事、女は家庭」について

	男子	女子
賛成	6.2	1.5
どちらかといえば賛成	46.5	5.4
どちらともいえない	39.3	31.5
どちらかといえば反対	20.7	35.0
反対	15.9	26.6
無回答	1.4	0
計	100 (145)	100 (203)

$\chi^2_{0.01} = 13.28 < 27.79 = \chi^2$        $df = 4$

3. 高校家庭科の学習内容

高校家庭科の内容は、大別して家族と家庭生活、家庭経済、食生活、衣生活、住生活、保育およびホームプロジェクトと学校家庭クラブ活動の7領域から構成されている。

学生達の高校家庭科での学習内容を表2からみると、最も多いのが男女とも食生活で90%以上、次いで衣生活の70~80%台であった。住生活と保育は、60~70%台であり、衣・食生活と比較すると幾分低かった。教育課程審議会では1987年12月の答申で、高校家庭科に対し「親となるための自覚を高め、よき家庭人として家庭生活の充実向上を図る実践的態度を育てる」<sup>6)</sup>ことを改善の具体的事項として示した。これらを照らし合わせてみれば、保育領域を実際に学習したという男子が63.7%、女子が73.5%というのは低すぎる数字であり、男女間に約10%の差異を生じたことも併せて検討課題といえる。

家族と家庭生活はともに4位であった。6位、7位という下位の順位にあったのは、家庭経済やホームプロジェクトと学校家庭クラブ活動で、割合は異なるものの男女間で順位が同一であった。カリキュラム編成からみると、学生達はどの領域も学習しているはずである。しかし衣・食・住生活に関しては学習したというものが多いのに対し、保育、家族、家庭経済やホームプロジェクトと学校家庭クラブ活動はそれほど多くなく、しかも学んだという割合は、女子の方がいずれの領域でも多いという結果であった。これは、男女同じように学習しても男子の場合には、学習したということさえ記憶に残り難かったことを示している。

保育、家族や家庭経済の領域は、男女共同参画社会推進に関わる意識改革や行動変革のために必要な知識や技術の習得と関わりが深い。またホームプロジェクトと学校家庭クラブ活動は、学校、家庭と地域社会を連携する主体的な学習活動であるので、生涯学習社会で求められる自己教育力を育成するに適した方法<sup>7)</sup>といえる。

したがって、家庭科が男女共同参画社会推進のための学習機会として十分機能するよう、男女によって学習への異なる意識をふまえた指導が一層必要となる。

表2 高校家庭科で学習した内容

	(%)	
	男子	女子
家庭と家庭生活	65.9	73.0
家庭経済	47.3	56.0
食生活	90.1	98.0
衣生活	76.9	89.0
住生活	70.3	71.0
保育	63.7	73.5
ホームプロジェクトと 学校家庭クラブ活動	40.7	45.5
計	100 (145)	100 (203)

$$\chi^2_{0.05} = 12.59 > 0.70 = \chi^2 \quad df = 6$$

#### 4. 家庭科のイメージ

男女大学生は、高校で家庭科を学習するようになってから、家庭科をどのような特徴をもつ教科であると理解したかを明らかにするため、そのイメージを調査した。

イメージ用語は、大学生の家庭科教育観を調査するに際して使用したものと同一15の用語<sup>8)</sup>を用いた。各イメージ用語は、5段階評定尺度によって得点化した。

表3から家庭科の基本的なイメージをみると、まず高得点を示したイメージ用語から判断して、男女とも「おもしろい」「深い」「創造的な」「女らしい」「主観的な」「好きな」「自由な」および「あたたかい」というイメージを持つ教科ということが出来る。このようなイメージ用語で表現できるということは、学生達は家庭科に対して、既成の枠にしばられないで、創造的に取り組み、学習しておもしろいし、好きであるという肯定的な評価をしているとみなせる。

男女必修化の影響による変容をみるため、特に「女らしい - 男らしい」に着目すると、その得点は男子3.43、女子3.74と女らしいとみなす傾向にあるといえる。このことから中学校の技術・家庭科に加えて、現行の教育課程では男女とも高校で家庭科を学んでいるが、女子教科としての伝統が強いためか、女らしいというイメージを十分に払拭できていないことを示していると考えられる。

次に低得点のイメージ用語から判断すると、「のんびりした」と「実践的な」というイメージを併せ持つということになる。家庭科は家庭生活を対象とする教科であるため、一人一人の生活実態を無視することは出来ない。したがって、生徒にとっては「のんびりした」という印象を持つことになったのかもしれない。「実践的」についても、実践性は家庭科の達成目的ではないが、手段としては非常に重要なものである。それゆえ教科の性格として、より実践的であると受け取られたものと考えられる。

これらのイメージ用語の得点に男女間の差があるか否かを調べるためt検定を行ったところ、「理論的な - 実践的な」「かたい - やわらかい」および「あたたかい - つめたい」という用語に5%水準で、「女らしい - 男らしい」に1%水準で有意差が認められた。

以上の結果から、男子は女子と比較して家庭科をより「理論的な」「かたい」「つめたい」や「男らしい」傾向にある教科と評価しているといえる。女子のみ必修時代における家庭科のイメージをみると、女子は男子よりも「創造的で、科学的、好きな」教科であると捉えていた<sup>9)</sup>。それが高校で家庭科を学習するようになってから、男子学生のイメージは大きく変容したといえる。

青年期における生涯学習としての家庭生活の課題

表3 家庭科のイメージ

	男子		女子		t 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
おもしろい - つまらない	3.62	1.06	3.66	1.03	0.34
深い - 浅い	3.27	0.91	3.34	0.92	0.69
強い - 弱い	2.87	0.84	2.76	0.74	1.26
科学的な - 非科学的な	2.99	0.89	2.99	0.88	0.03
新しい - 古い	2.88	0.88	2.91	0.88	0.31
理論的な - 実践的な	2.48	1.07	2.25	0.98	2.03*
創造的な - 模倣的な	3.25	0.98	3.31	0.98	0.60
かたい - やわらかい	2.74	1.01	2.49	0.93	2.32*
女らしい - 男らしい	3.43	0.88	3.74	0.84	3.24**
主観的な - 客観的な	3.19	0.85	3.30	0.86	1.14
緊張した - のんびりした	2.26	0.91	2.17	0.79	0.88
速い - 遅い	2.74	0.76	2.69	0.63	0.65
好きな - 嫌いな	3.59	1.01	1.01	1.06	1.66
自由な - 拘束的な	3.55	0.96	3.60	0.96	0.45
あたたかい - つめたい	3.79	0.94	4.06	0.83	2.78*

\* ...p<0.05      \*\* ...p<0.01

5. 家庭科のイメージの主成分分析

さらに学生の持つ家庭科のイメージがどのような構造をしているのかを検討するため、主成分分析を行った。主成分分析を適用する場合、主成分を幾つとるのが問題となる。今回の調査では、主成分が固有値 1.0であるものを取り上げることにした。その結果、男子は4つの主成分が抽出でき、累積寄与率は53.9%であった。同様にして女子では5つの主成分で、累積寄与率は59.6%になった。

表4から男子についてみると、第1主成分はその負荷量から判断して、「おもしろい - つまらない」「自由な - 拘束的な」「好きな - 嫌いな」「あたたかい - つめたい」という4つのイメージ用語から感情的な評価に関する面と、「新しい - 古い」「強い - 弱い」「かたい - やわらかい」「深い - 浅い」という用語から教科の内容面での深まりを示すという二面を併せ持っているといえる。第2主成分は、「理論的な - 実践的な」「科学的な - 非科学的な」という2つのイメージ用語によって理論的な面を、「女らしい - 男らしい」「緊張した - のんびりした」「速い - 遅い」という3つのイメージ用語から教科としての緊迫感を表しているにとらえた。第3主成分は、「創造的な - 模倣的な」というイメージ用語で代表され、教科の創造性を表しているといえる。第4主成分は、「主観的な - 客観的な」で代表され、教科内容の主観性を表しているといえる。

女子の主成分分析の結果表示は省いたが、同様にしてみると、第1主成分は「おもしろい - つまらない」「好きな - 嫌いな」「あたたかい - つめたい」「自由な - 拘束的な」という4つのイメージ用語によって、感情的な評価に関する面を表し、「創造的な - 模倣的な」「深い - 浅い」という用語によって、教科の内容面での深まりを表しているといえる。第2主成分は、「緊張した - のんびりした」のイメージ用語の負荷量が最も大きく、その他「新しい - 古い」「理論的な - 実践的な」「強い - 弱い」の用語が関連して、教科としての緊迫感を表しているにとらえた。第3主成分は、「創造的な - 模倣的な」というイメージ用語で代表され、教科の創造性を表しているといえる。第4主成分は、「主観的な - 客観的な」「科学的 - 非科学的」によって、教科の科学性・

客観性を表しているといえる。第5主成分は、「速い - 遅い」によって代表される活動的な側面を表しているとみなした。

このように主成分分析によって、主成分の数を男子は4つ、女子は5つ抽出できたことから、家庭科のイメージ構造は、女子の方がより多面的であるといえる。また第3主成分は男女間で異なっていたが、その他はほぼ同じか類似していた。

家庭科のイメージ構造が男女間でかなり類似してきたのは、家庭科の男女必修化による影響が大きいものと考えられる。

表4 家庭科のイメージの主成分分析(男子)

イメージ用語	主成分負荷表			
	第1主成分	第2主成分	第3主成分	第4主成分
おもしろい - つまらない	0.743	-0.036	-0.457	-0.086
自由な - 拘束的な	0.727	-0.255	0.152	0.042
好きな - 嫌いな	0.702	-0.056	-0.437	-0.141
あたたかい - つめたい	0.656	-0.306	0.147	0.072
新しい - 古い	0.500	0.256	0.282	-0.126
強い - 弱い	0.495	0.444	-0.120	0.161
かたい - やわらかい	-0.487	0.406	0.129	-0.099
深い - 浅い	0.456	0.383	-0.046	0.436
理論的な - 実践的な	-0.092	0.640	0.143	0.045
女らしい - 男らしい	-0.016	-0.592	0.355	-0.021
緊張した - のんびりした	-0.151	0.529	-0.135	-0.524
速い - 遅い	0.196	0.513	0.054	-0.167
科学的な - 非科学的な	0.324	0.416	0.324	0.375
創造的な - 模倣的な	0.457	-0.013	0.662	-0.278
主観的な - 客観的な	0.399	-0.053	0.053	-0.541
固有値	3.486	2.278	1.271	1.091
寄与率	0.232	0.151	0.084	0.072
累積寄与率	0.232	0.383	0.467	0.539

## 6. 家庭の仕事の実践状況

家庭の仕事をすることは、家庭科で学んだことを実際の生活に活かすという点で、家庭科学習の成果を示すものとなる。家庭の仕事は、日々の生活に必要な営みである。食事のしたくや家族の話し相手など9項目を取り上げ、学生の実践状況を調査した。

家庭の仕事の実践状況を、「大変よくする」(3点)、「時々する」(2点)、「全然しない」(1点)の3段階評定尺度によって求めた。その結果、自宅かアパートかという居住形態による差異はほとんどなく、表5のように、「せんたく」「買い物」「ごみ出し」と「家族の話し相手、相談相手」を除いて、女子の頻度が総じて高く、男女差が明確であった。特に「食事のしたくや料理」、「食事の片付け」、「ボタン付け・ほころび直し」のように技術を伴う内容と家族関係を基盤とする「家族の話し相手・相談相手」に関しては、t検定により1%水準で有意差が認められ、性差が顕著であった。逆に性差が見られなかったのは、大学生のような一人暮らしの生活において、必要不可欠の内容といえる。

家庭科は高校段階での男女必修化によって、中学校3学年で選択領域の学習に若干の領域差が見られる程度で、学習機会としての性差はほとんどがなくなったはずである。にもかかわらず、

青年期における生涯学習としての家庭生活の課題

Ⅲ 3 . 高校家庭科の学習内容の項で明らかにしたように、実際には高校家庭科で学習した内容には性差が認められた。さらに、家庭教育の影響もあって、家庭の仕事の実践状況には男女間で差異があったと推察できる。

表 5 家庭の仕事の実践状況

	男子		女子		t 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
食事のしたくや料理	2.05	0.66	2.27	0.59	3.21**
食事の片付け	2.20	0.66	2.51	0.59	4.45**
部屋の整頓やそうじ	2.23	0.56	2.38	0.53	2.56*
風呂場の掃除	1.91	0.66	2.07	0.62	2.28**
せんたく	2.60	0.63	2.60	0.64	0.08
買い物	2.44	0.69	2.54	0.62	1.33
ボタンつけ、ほころび直し	1.37	0.62	1.90	0.65	7.64**
ごみ出し	2.50	0.69	2.47	0.77	0.45
家族の話し相手、相談相手	1.75	0.70	2.16	0.71	5.11

\* ...p < 0.05

\*\* ...p < 0.01

7 . 家庭教育の実態

家庭の仕事の実践状況には性差が見られたので、その原因を探るため、家庭の仕事の取り組み方や役割分担に関する家庭教育の実態を明らかにする。

性別役割形成にかかわる家庭教育として表 6 に示したように、今までに家族から「家庭の仕事を手伝いなさいと言われたことがありますか」と「男の子だから～しなさい、女の子だから～しなさいと言われたことがありますか」の 2 項目について尋ねた。これら 2 項目とも男子と比較して女子の方がよく言われたという割合が高く、対照的な結果であった。

まず「家庭の仕事を手伝いなさい」をみると、男子で最も多いのは「時々言われた」で 42.1%、女子では「とてもよく言われた」が 45.3% であった。また「とてもよく言われた」と「時々言われた」とを合わせると、男子は 69.7%、女子は 79.8% になった。「たまに言われた」と「全然言われなかった」についても同様に合わせると、その割合は男子が 30.3% であるのに対し、女子は 20.2% にとどまった。このように、家庭ではその仕事の遂行について男子よりも女子の方により一層教育をする傾向にあり、家庭の仕事を担当するのは女子という考え方が依然として強く残っているといえる。

「男の子だから～しなさい、女の子だから～しなさい」についても同様の傾向が認められた。これら二項目について男女間で  $\chi^2$  検定を行ったところ、前項目には 1% 水準で、後の項目には 5% 水準で有意差が認められた。すなわち、家庭生活に関わる家庭教育は、その対象が男子か女子かによって異なる様相を示すことが明らかになった。

さらに家庭教育の実態と家庭の仕事の実践状況との関連をみると、男女とも「家庭の仕事を手伝いなさい」とよく言われたとするものの方がそうでないものよりも約 1.5 倍多く実践していた。また男子は「男の子だから～しなさい」と言われようと言われまいが、実践状況にほとんど差異はなかった。女子では「女の子だから～しなさい」とよく言われたものの方が言われなかったものよりも約 1.7 倍のものが、実際に家庭の仕事を実践しており、大学生がこれまで受けた家庭教

育と、家庭の仕事の実践状況には、関連性のあることが伺えた。親の家庭教育観の違いは、その子どもである学生の生活行動に強い影響を及ぼしていることが明確になった。

家庭教育や子どもの生活実態等の調査によれば<sup>10)</sup>、日本の親は男の子らしくとか女の子らしくというように、子どもの性別によって区別した育て方をしている点で、他の国々の親よりも依然として固定的な性別役割分業観に強く支配されていることが明らかにされている。今回の調査結果を合わせて考えると、親をも含めた意識改革プログラムの必要性を示している。

表6 家庭教育

(1)「家庭の仕事を手伝いなさい」

	(%)	
	男子	女子
とてもよく言われた	27.6	45.3
時々言われた	42.1	34.5
たまに言われた	24.1	17.7
全然言われなかった	6.2	2.5
計	100 (145)	100 (203)

$$\chi^2_{0.01} = 7.81 < 10.39 = \chi^2 \quad df = 3$$

(2)「男の子だから～しなさい、女の子だから～しなさい」

	(%)	
	男子	女子
とてもよく言われた	11.7	16.8
時々言われた	27.6	37.4
たまに言われた	28.3	26.1
全然言われなかった	32.4	19.7
計	100 (145)	100 (203)

$$\chi^2_{0.01} = 11.34 < 12.95 = \chi^2 \quad df = 3$$

## 8. 将来の家庭の仕事・育児の分業意識

家庭の仕事・育児の分業意識をより実際に即してみるため、将来結婚した時夫婦でどのように分かち合いたいと捉えているかについての考え方を求めた。結果は表7のようであった。

「夫婦で半々に協力する」と答えたものは、男女ともに過半数を占めて最も多く、次いで「妻が主にやる」であった。「妻が全部やる」や「夫が主にやる」は、非常に低く、「夫が全部やる」にいたっては皆無であった。

このように、家庭の仕事や育児の役割分業は夫婦で半々に協力するという共業意識を持つものが男女とも最も多いものの、その傾向は女子の方がより一層強く、男子との間には $\chi^2$ 検定により1%水準で有意差があり、明確な差異のあることが明らかになった。

表7 将来の家庭の仕事・育児の分担意識

	(%)	
	男子	女子
夫婦で半々に協力する	59.3	71.4
妻が主にやる	32.4	26.1
妻が全部やる	4.1	0.5
夫が主にやる	2.1	0
夫が全部やる	0	0
無回答	2.1	2.0
計	100 (145)	100 (203)

$$\chi^2_{0.01} = 13.28 < 14.21 = \chi^2 \quad df = 4$$

ではなぜそのように考えるかについて、理由を自由記述によって求めた。

まず「夫婦で半々に協力する」という考え方については、男女とも「共働きならばどちらも忙しいので、お互いに協力すべきだから」、「得意、不得意を補い合ってやればよいから」というような理由が多くを占めた。これに加えて、女子からは「女性だからといって全部押し付けられるのはおかしい」、「家庭の仕事や育児の楽しみや苦労を分かち合いたいから」という考え方が出さ



## 青年期における生涯学習としての家庭生活の課題

れ、家庭の仕事や育児は男女がともに積極的に分担する必要があるという考え方が基盤になっていることが理解できた。

「妻が主にやる」と答えたものの理由は、男女とも「夫の方が仕事の拘束時間が長いだろうから」という理由が多くを占め、次いで男子からは「女性の方が得意だから」、女子からは「好きだから、やりたいから」というものであった。

平成7年に行われたNHKの「生活時間調査」<sup>11)</sup>によると、女性による家庭の仕事の一日平均は平日で3時間52分、男性は29分であることから分かるように、現在多くの家庭では、女性が主に家庭の仕事や育児を分担している実態がみられる。大学生における家庭の仕事の分業意識形成には、このような各家庭における役割分業の実際がモデルとして強く機能したと考えられる。

「妻が全部やる」と答えたものの理由には、男女とも「自分の母親がそうであったから」と答えており、親の働く姿がまさに考え方を形成する際のモデルとなっていた。

以上のように大学生の場合、男女とも60%以上は「夫婦で半々に協力しながら家庭生活を築いていこう」としていることが理解できた。しかし自由記述を見ると、男子は「協力すべき」となっているのに対し、女子では「協力して欲しい」という表現が多く見られ、女子は反発しながらも固定的な性別役割期待を内面化しようとしていることが伺え、全体として、男女大学生とも親世代の実態に即した捉え方から、十分抜け出せないことが理解できた。

また、「男女に決まった役割はない」、「家庭の仕事は役割分担ではない」というように性別役割分担を完全に否定した考え方がみられる一方で、「やりたい方がやればよい」という一見自由な意思決定を尊重するという考え方が現れているが、行き付く先の結果を想定すれば、伝統的な考え方からそう距離のあるものではないといえる。

### 9. 女性の職業観

性別役割分業意識と深く関わる女性が職業を持つことをどう捉えるかについてみると、表8のように男女とも「女性は職業を持たないほうが良い」、「結婚するまでは職業を持つほうが良い」や「子どもが出来るまでは職業を持つほうが良い」など、職業よりも何よりも家庭生活を優先する型は極めて少数か皆無であった。

男子は「子どもが出来てもずっと職業を持つほうが良い」が31.7%と最も多いものの、その割合は1/3にも満たなかった。次いで多いのは、「子どもが出来たらやめ、大きくなったら再び職業を持つほうが良い」で、24.1%であった。男子では「分からない」というものが34.5%と女子の約2倍を占め、パートナーとなるべき女性の生き方に無関心のものが多いといえる。

女子では「子どもが出来たらやめ、大きくなったら再び職業を持つほうが良い」が38.4%と最も多くを占めた。次が「子どもが出来てもずっと職業を持つほうが良い」が37.0%であったが、両者は大差ない値であった。これらの数値からは、最も多いのは職業中断型で、今後の人生に職業を明確に位置付けようとするものは4割にも満たないといえる。

女性の職業観の形成には、モデルの一つとなる母親の職業歴の影響が大であると考えられる。そこで、母親の職業歴と大学生の職業観との関連性を明らかにすることにした。

仕事と家庭をめぐる女性のライフコース・パターンすなわち職業歴は、3類型にまとめることが出来る。母親の職業歴を分類するため、長津の方法<sup>12)</sup>を参考にして、子どもの発達段階を、幼児の頃、小学校低学年、小学校高学年、中学生、高校生および現在の6段階に分けて、各々の段

階に職業を持っていたか否かによって4つのタイプに分けた。すなわち、①継続就業型：すべての発達段階において母親は就業している、②再就職型：小学校低学年以降のどこかの段階で仕事に就き、現在まで続けている、③その他の就業型：6つの発達段階のどこかで一度は就業し、止めた経験を持つ。④専業主婦型：すべての発達段階において母親は無職である。

このように母親の職業歴を4つのタイプに分けて、各々のタイプの母親を持つ大学生は、どのような職業観を持っているのかを把握した。

男子の場合、母親が「継続就業型」のものは、「子どもが出来てもずっと職業を持つほうが良い」とするものが48.5%とどの型よりも多かった。しかしその他のタイプの母親には、その母親の職業歴と息子である男子学生の職業観には、傾向的な関連性は認められなかった。

女子については、表9に示すように母親が「継続就業型」のものは、「子どもが出来てもずっと職業を持つほうがよい」が36.9%と最も多く、「再就職型」のものは、「子どもが出来たらやめ、大きくなったら再び職業を持つほうが良い」が最も多い57.1%を占めるというように、母親の職業歴とその娘である大学生女子の考え方には関連性が認められた。

このように大学生のとらえる女性の職業観の形成には、特に女子の場合、親の後ろ姿すなわち実際のモデルとして機能する母親の職業歴が強い影響を及ぼしていた。したがって、職業選択や職業歴は世代を超えて再生産されてきたといえる。

したがって今後の課題として、同じような現象が再生産されるのではなく、そこに含まれる問題点を克服し、男女共同参画社会にふさわしい新しい職業観が持てるよう理論及び実際に通じるような指導の工夫が必要となる。

表8 女性の職業観

	(%)	
	男子	女子
女性は職業を持たない方が良い	2.1	0
結婚するまでは職業を持つ方が良い	1.4	0.5
子どもができるまでは職業を持つ方が良い	5.5	3.0
子どもができたらやめ、大きくなったら再び職業を持つ方が良い	24.1	38.4
子どもができてずっと職業を持つ方が良い	31.7	37.0
分からない	34.5	17.2
無回答	0.7	3.9
計	100 (145)	100 (203)

$$\chi^2_{0.01} = 15.09 < 22.41 = \chi^2 \quad df = 6$$

#### IV まとめ

高等学校で家庭科を学習した男女大学生を対象に、男女共同参画社会を推進するために重要である、家庭生活と職業生活を営む能力を身に付けているかを検討し、家庭生活における青年期の生涯学習の課題を求めるための基礎資料を得ることを目的とした。

その結果、高校で家庭科を学習した男女大学生は、現在だけでなく将来の役割分業に関して、共業意識が強い傾向にあるものの、男女差が極めて顕著であった。また家庭生活に関わって男女同じよう学習しているにも関わらず、男子は女子に比較して学習したという事実認識が乏しかった。家庭の仕事の実践状況も女子の方がよくやっているということが明らかになった。

青年期における生涯学習としての家庭生活の課題

このように男女差が顕著であったことには、家庭における親の役割分業の実態が影響を及ぼしているとともに、親の家庭教育にも一因があった。そのため、家庭科を男女が共に学習するという点を生かして、性別役割分業意識を変革するような教材の工夫や男女差を踏まえた家庭科の指導が重要となる。家庭科を通して、親をも含めて性別役割分業を補正する取り組みがなお一層必要である。

表9 母親の職業歴と女子学生の職業観

	(%)			
	継続就業型	再就職型	その他の就業型	専業主婦型
女性は職業を持たない方が良い	0	0	0	0
結婚するまでは職業を持つ方が良い	0	2.4	0	0
子どもができるまでは職業を持つ方が良い	0	0	6.7	6.9
子どもができたらやめ、大きくなったら再び職業を持つ方が良い	26.4	57.1	38.4	41.5
子どもができてもずっと職業を持つ方が良い	36.9	16.7	33.3	24.1
分からない	13.9	21.4	18.3	17.2
無回答	2.8	2.4	3.3	10.3
計	100(72)	100(42)	100(60)	100(29)

$\chi^2_{0.01} = 30.58 < 36.25 = \chi^2 \quad df = 15$

参考文献

- 1) D.レビンソン著、南博訳(2000)；『ライフサイクルの心理学』、講談社、pp 85～93。
- 2) 多々納道子(1998)；「これからの学校・家庭の役割と家庭科教育」『家庭科の21世紀プラン』、日本家庭科教育学会編、家政教育社、pp 86～87。
- 3) 教育課程審議会答申(1998)；「幼稚園、小学校、中学校、高等学校、盲学校、聾学校及び養護学校の教育課程の改善について」。
- 4) J.ブルックス＝ガン、W.シェンプ・マチュウズ著、遠藤由美訳(1982)；『性別役割 その形成と発達』、家政教育社、pp 24～26。
- 5) 多々納道子(1997)；「家庭内の性別役割分業を考える - これからの家族と家庭の仕事」、日本家庭科教育学会「家族」教育研究特別委員会、『これからの「家族」教育 カリキュラム構想と教材開発』、日本家庭科教育学会「家族」教育研究特別委員会研究報告書、pp 89～93。
- 6) 教育課程審議会答申(1987)；「幼稚園、小学校、中学校及び高等学校の教育課程の基準の改善について」。
- 7) 中屋紀子、佐藤淑子(1977)；「高等学校家庭科ホームプロジェクトの指導方法」、宮城教育大学、第32巻、p 215。
- 8) 多々納道子(1988)；「大学生の家庭科教育観 教育学部学生の場合」、島根大学教育学部紀要、第22巻第2号(教育科学編) p 36。
- 9) 8)と同じ、pp 37～38。
- 10) 総務庁青少年対策本部(1996)；『青少年の生活と意識に関する基本調査報告書 青少年の生活と意識に関する基本調査報告書』、大蔵省印刷局、pp .141～142。

多々納道子・河原 亜姫

---

- 11) NHK 放送文化研究所編 (1966) ; 『日本人の生活時間』、NHK 出版、p 36。
- 12) 長津美代子 (1991) ; 「大学生の性役割意識 男女間のギャップを中心にー」、家政学雑誌、第42巻、11号、pp 26 ~ 27。